

皆さん、こんにちは。今日は、テキストの十一頁の「一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願 仏言廣大勝解者 是人名分陀利華」。この二行四句について学びたいと思います。前からの関連がありますので、「獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣」からご一緒に拝読をしたいと思います。現代語訳も読みますのでゆっくり読みますから、どうぞご唱和いただきたいと思います。

獲信見敬大慶喜 即横超截五惡趣

真（まこと）の信を獲得（ぎやくとく）することができれば、
いのちの尊さに目覚めて敬うことができ、
大きなよろこびに満たされます。
そのときただちに、迷いの生き様が断ち截（き）られて
本願に生きるものとなるのです。

一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願

善し悪しに縛られているすべての人々が、
如来の、かならず救おうという誓願を聞信するならば、

仏言廣大勝解者 是人名分陀利華

み仏は、ほんとうによくわかった智慧のある人だとたたえられ、
この人を、泥に咲いて濁りに染まらない
分陀利華（白蓮華）と名づけます。

どうもありがとうございました。先程はご住職様のご導師によって「正信偈」のお勤めをいつものようにさせていただいて。まことに感銘の深いことでございます。いつも思うのでありますが、親鸞聖人がご製作くださった「正信偈」を、今の時代に一緒にお勤めできるということは、まさにこの座に親鸞聖人が表れてくださっておる、そういう感じを持つことができます。

ご承知のようにあつという間に七月になったのでありますが、九州の北部では豪雨によって沢山の方々が亡くなられました。行方不明の方々が沢山おられる。大変難渋をしておられるわけであり。心からお見舞いを申し上げたいと思います。

それと同時に、私は彼の地の人々から問いかけられているということを感じるのです。東京はご承知のように天気もいいですし、恵まれておりますが、どういうふうに問いかけられておるかという、あんた方は大丈夫ですかと。いつ遭うかわかりませんよと。東京はましてや関東大震災のあった都市でありますから、いつどういうことが起こるかわかりません。決して他人事にはできませんよと。そういうことが問いかけられておると。

それから九州で被災に遭われた方の言葉の中に、孤立していたのがやっと助けられて、家族に会う時に、家族に会うということはこんなに新鮮だとか、よく会えたということを感じておられた姿が印象に残りました。

問いかけられているということは、私たちの日常の一日一日が、そういう新鮮な感覚を持って、実感を持って生きておられますかという。そういう問いかけになるかと思えます。そういう意味ではこの人間の世界に起こったことは、あらゆるものが他人事ではなく、私たち一人ひとりに問いかけられている言葉であると言えるのではないのでしょうか。

これは有名な言葉で、「天災は忘れた頃にやってくる」という。寺田寅彦という科学者が言われた言葉です。それは本当にそうだと思います。科学がどれ程進歩し、あらゆることがわかってくるようなことになっても、絶対に人間の世界に起こることが全部わかっているとは言えない。そういうことを抱えておるわけですから、それだけ人間としては謙虚に人間自身を問う。そういう眼を持って生きなければならないと思います。そうやって私たちは親鸞聖人にお会いすることができて、「正信偈」をいただいて生きるということは、まことに大きな恩恵であると思います。

五月の時には、「獲信見敬大慶喜 即横超截五悪趣」という一行二句について学びました。大きなテーマとしては、「横超の大道」という。今日は「凡夫に開かれた仏道」。凡夫というのは、誰であろう。他でもない、この身に開かれている仏道である。自分自身に開かれておる仏道である。そういうことを親鸞聖人の教えに学びますと、教えられるのでございます。

信心を獲るとどういう現実、事実が開かれてくるのか。まことの信心を獲得することができれば、命が本当に尊いということに目覚めて、敬うことができる。見て敬う。見てということは本当に遇うということですね。これは尊い先生だけではありません。生きとし生けるもの。命あるもの。私たちがこうして生きておるといふことは、命をいただいて生きておるわけです。

だから豚だって牛だって人間に食べられる為に生まれてきたのではないのです。人間は勝手にね、飼育して、食べて。それは人間の傲慢ですね。生きとし生けるものの命をいただいて。だからそういうことを踏まえれば、家族だって、友だちだって、社会の繋がり、やはりそれぞれの方が御苦労くださったということにおいて、私たちの生活が成り立っているわけですね。

一番、敬うということが欠落しているのではないかと思われてなりません。敬うということが欠落するとですね、やはり貧困ですね。寒々とするわけですよ。エゴイズムの中心の沙汰になりまして、豊かさということは物質的に文明としては非常に叫ばれておりますけれども、肝心要のそれを受け取る人間の生き方、生き様。難しいことと言えば精神。精神生活が開かれていないと、文明を文明として受け取ることもできない。そういう問題になるかと思えます。

そして大きな喜びを得ることができる。その時、直ちにすなわち横（よこさま）に五悪趣を超截す。横というのは、人間の自力の計らいじゃなくして、如来の本願力。大きないのちの、目覚ませようというそのはたらきにおいてですね、五悪趣を截するという。五悪趣というのは、地獄・餓鬼・畜生・人・天という、迷いの生活。広げれば六道ですね。六道というのは流転、迷いの生活です。五悪趣という言葉は古いかも知れませんが、現実は今私たちが生きておる現実であると。

地獄は人間苦悩。餓鬼は満足を知らない。畜生は人間が道具化されてしまっているということでもあります。そしてまた他の人を道具のように見るならば、まさにその人自身が畜生道に堕しているということでありまして、人間と人間とが敬って出遇うことはまことに困難であると。今の時代こそ求められておるといふことが言えるわけですね。

本願に生きるということにおいて、信心を得るといふことにおいてそういう六道流転、五悪趣に迷うという生活から直ちに人間に立ち戻ると。もう少し丁寧に申しますと、これが人間の生活と言えるのかという、大きな問いを持つわけですね。畜生の生活になっていないか。問いを持つということが本当に大事ですね。

問いを持つということは、どこから飛んでくるものではありません。その人自身の存在から湧き起こってくる。「人心の至奥より出づる至盛の要求」ということは、この身、私自身の中に一番深いところからやむにやまれない要求として起こってくると。作ったのではない、起こってくるのですね。そこに至盛という最も盛んなるといふ。だから宗教心ということが非常に広く深い。人間の普遍の問題として、根本問題として明らかにされておる。根本の課題ですね。

仏法が課題としている根本課題は生死の迷いを超えるということですよ。生に愛着し、死に苛まれ

る。そういう問題を超越するというごさいます。先程九州のことを申し上げましたが、ああいう事実に遭うと、その地域の方が大変なことは申すまでもありませんけれども、私たち自身が問いかけておる。あなた、生きておると言えますかと。厳しい問いです。本当に生きておると言うならば、日常の一日一日が、いや、一瞬一瞬が遇い難くして遇うと。受け難くして受けている。そういういのちであるということに気が付くことであると思います。

信を獲るということにおいて、曾我先生のお話を紹介したいと思うのですが、信心を、如来より賜るという表現をするわけでごさいます、『歎異抄』の中にもそういう表現があるわけでごさいます。曾我先生は賜るという表現では弱ごさいますと。獲得するとおっしゃいませという。

獲得ということについて親鸞聖人は因果ということ、因位果浄ということをおわかっておられますけれども、本当の私たちの人生それ自身において深いところから現実只今に至るまで、いのちの尊さに目覚めて生きるという。信心獲得するということが一番願われているということであると。

これも前に紹介した、古い歌でごさいます。

たとえももとせ
生くるとも
こよなき法を
得しらずば
知りて生きなん
一日のいのちぞ
これにいやまさる

百年、無駄無駄生きても、法に目覚めて生きる一日が尊いと。これが人間だろうと思いますね。人間存在というのはそういうものではないでしょうか。

例としてはあまり適当ではありませんけれども、罪を犯して、獄に繋がれて死刑にあった方が沢山おられますけれども。死刑にあった人の中で、今までは自分の生き方が間違っていたということに、本当に気が付かれて仏法に遇う。仏法に遇うということは本当に大事であったと。やっとな獄に繋がれてこのことに気が付いたという方もいらっしゃるわけですね。犯罪は決して認めるわけにはいかない。許されないけれども、犯罪を通して、縁として生かされて生きておるいのちの尊さに目覚めたという。その方の人生は尊いいのちとして誕生したと。牢獄において誕生したということが、言えるかと思えますね。

それは常識的な眼で価値批判するようなことでは間に合わないと思います。私たちが生きるということはそういう尊いいのちをいただいて生きているのであると。そのことに中々気が付かないという問題がごさいます。信心を獲るということが人間の上はどういうことをもたらすか。それはつまり私自身の上はどういうことをもたらしているかという問いと一つであります。

今日はですね、「一切善悪凡夫人 聞信如来弘誓願」。現代語訳では、善し悪しに縛られているすべての人々が、如来のかならず救おうという誓願を聞信するならば、仏陀釈尊が、廣大勝解の人だと言われ、この人は分陀利華、白蓮華であると名づけられると。最上級のね、こんな讃嘆の言葉が言われる。凄いですね。

そこにまず「一切善悪凡夫人」という。一切のということはすべての善悪、善し悪しに捉われていると。善し悪しに捉われていない人はおよそいないでしょうね。人間は善し悪しを、語弊があるけれども、好きだって言ったら申し訳ないのだけれど。よろずのことにつけて、善し悪しということを考えるでしょう。

例えば九州のあの地へたまたま行って、被災に遭った人は、なんとまあ悪い縁だったのだろうと。極端に言う人は、あの人は悪いことをしてあんなのだということまで言いかねないのです。これは非常に恐ろしいのですよ。運勢見なんていうのがあるでしょ。これも好きなのですよ、人間はね。

娑婆ではこういうことをやりますが、浄土真宗では運勢を見るというような必要はありません。何故ないかということ、信心ということ。人間の本当に深い自覚。本当の意味の自覚ですね。それによるから。昔悪いことがあって、今は悪いことがあるのだというふうなことを言う必要はない。必要がないのですね。しかるべきようになるような、いのちの歩みを歩んで来て、今があるということでもありますから。

因縁の道理。深い道理に基づいてですね。因縁ということとは、原因、結果。そこに縁があるわけですね。この因果の法則に則さないものは生きものとは言えないでしょうね。やはり生きるということは、原因があり、いのちをいただいて、そこに縁があって、結果がある。生まれてきたのだけれども、お母さんに早く死なれて、辛い人生を生きると。しかしこれは閉ざされるならば、迷いの中に沈むわけですが、開かれるならば、人生自身が開かれるわけです。どのような縁があってもその縁を事実として受け止めることができる。かけがえのない事実として受け止めることができる。この事実として受け止めることは困難。なかなか容易じゃないわけですよ。法に触れて、仏法に触れて、初めて本当に事実を事実として認められるということであると私はそのように教えられますね。

善し悪しということについて『歎異抄』の後序のところではですね、

まことに如来の御恩ということばをばさたなくして、われもひとも、よしあしということのみもうしあえり。
(真宗聖典 六四〇頁)

という有名な言葉がございます。ここでは唯円大徳も入っているわけです。綺麗すっぱりと私は大丈夫というところにおられない。唯円はね。やはり問題を抱えておる身であるというそういうところに立っておる。だから『歎異抄』というのは非常にこう人を打つものがあるわけです。よしあしに迷い、捉われると。

凡夫ということにつきましては、善し悪しに迷う存在ですね。それから金子大栄先生がおっしゃっていたのですが、思い切った言葉でね、愛妻愛子、これが凡夫ですと。本当に具体的にね、おっしゃった。そこに金子先生がおられるということですよ。こういう言葉をいただくと、非常にはっきりするでしょう。ああ自分のことだっというようなことが。

それから有名な言葉では聖徳太子が、日本においては仏教に生きられた方として、十七条憲法の中で、

共に是れ凡夫(ただびと)ならくのみ
(真宗聖典 九六五頁)

という言葉がね。これも大変な言葉です。聖徳太子も凡夫として自分を見出しておるという。

司馬遼太郎という方の中学時代の思い出の中で、先生がクラスで話すときに、この中に凡夫がいると。誰が凡夫と思うかねと、問題を出したのですね。生徒さんはね、人の顔を見て。で、ちょっと時間が経って、先生が、私は凡夫でありますと言ったと。これは強烈ですよ。先生が凡夫なんて常識的には特に昔の教育ではね、思わないではないですか。聖職者でしょ。教育という仕事は大変大事な、人間の生き方の根本に関わるような仕事をしておると。その先生はやはり仏教系の学校

だったのだらうと思うのですが。私が凡夫でありますと言われたと。

親鸞聖人はね、はっきりと私が煩惱熾盛罪惡深重の凡夫であるということをね、おっしゃっておられる。それがね、ただおっしゃっておられるというような話じゃないのですよ。自己発見ですね。人間発見。出遇いなのです。事実なのです。紛れもない事実である。そこに座る。場が決まるわけですよ。不動の大地に凡夫であるということを教えられると。だから甘い夢とかごまかしに乗る必要がなくなってくる。そういう存在の大地。存在の大地が獲得された。ついに見出したと。

凡夫であるという自覚において、そういう揺るぎのない。十方のよろずの衆生みな凡夫であると。親鸞聖人の思想ということとは、宗教心ということがある。本願に呼びかけられた十方衆生ということとは十方のよろずの衆生なり。すなわち我らなり。十方衆生が我らなりと言われておりまして。これは有名な一念多念証文の中にある言葉ですけれども

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず

(真宗聖典 五四五頁)

その親鸞聖人の凡夫というその自覚、認識は本当にすごいですよ。このような凡夫が念仏の教えに遇い、まことの信心をいただいて、白道を生きるものになるという、そういうことを言われています。非常にリアリティーがね。現実性が本当に底を穿つようにね、表わしておると思います。

ここまでおっしゃってくださるというのは本当にありがたい。決して自分が空威張りする必要はないのです。見せかける必要もないのです。けど人間というのは悲しいかな、空威張りしたり、見せかけたりするのです。凡夫の事実には立ち帰らせていただくということが大きな意味ですね。

これは曾我先生のお言葉ですが、凡夫とは肉体を持っておる存在であるという。これはもうぴしゃっとね、押さえられている。この生身の身体ですよ。この生身の身体を持っておるということですね、そこから何が出てくるかわからないわけです。腹が減れば、飢えて、喉が渇く。そうすると店にあるパンや、そういうのが欲しくなる。ことによったら手を出し兼ねないという。肉体を持っておるという。これはもう大変なね。この身を持っておるということですね。観念としては、理屈としては綺麗なことがいくらでも言えて、まるで自分ができるかのように言うことができる。しかしそれは肉体を持っておるということは、事実であってね。中々できないという。

自分の子どもが飢えて食べ物を欲しがっている。隣の子どもも飢えて欲しがっていると。どうなりますか。余程の人は分けるでしょうね。しかし量が少なきときは、自分の子どもにあげてしまう。あげないとしてもあげたいと思う。だから肉体を持つということは非常に厳しい。

浄土真宗はね、このことを絶対に決して忘れない。身を持って生きておるということ。観念や美しい理想で済ませない、済ませられないという問題があるわけです。そういう問題は、例えば歳を取れば人生、円熟するということもそういう面もあるけれども、些細なことが気にかかるということがあるわけです。今までは尿漏れとかうんち漏れとかっていうことを他人事で見ても済ましていたのが、縁があれば自分自身の上で起こってくるということですね。そういうことを、どう受け止めることができるかという。そこに事実としての肉体に出遇うということは、肉体をずっと持っているのですよ。持っているのだけれど、忘れていたということがあるのです。肉体の事実をね。

これね、ごめんなさい。排泄のことを申し上げます。排泄がね、時間においてできるというのは大変なことですよ。失ったらわかるのです。大変なこと。人間はそういう大きな恩恵というか、はたらき。機能。機能をいただいておるのだけれど、気が付かないのです。当たり前になるのです。驚くべきことを一番驚かないのが人間です。自分自身です。

私たちの身体は血管が巡っておると。地球一周するのですかね、二周するのですかね。それ程の血管が巡っているわけです。だけど気が付かない。当たり前になっているという。だから不可思議の事実というのはこの身の上にはたらいっているということですね。結婚もし、子どもに恵まれるということもこれは不可思議の事実ですよ。今の時代の中で六十億もいる人間の中という。これは本当に不可思議の事実なのです。だけど慣れちゃうと当たり前になってね、驚きを失ってしまう。それは凡夫の悲しい事実。

だから善悪の凡夫という中にはそういう驚くべき事が。驚きがないというか。善し悪しに捉われ切っておるといふ問題があると思えますね。そういう人間に凡夫の自覚が与えられるという。

さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし

(真宗聖典 六三四頁)

これは『歎異抄』の十三章の中にある、有名な言葉ですけれども。そうなるような業縁がもよおせば、どのような振る舞いも。絶対私は人なんか殺さないと言っている、保障はありません。食べるものが全くなにもない。人の肉しかない。という時に肉を食わないかという、肉を食べないという保障はない。たまたま肉を食べて命を繋いで帰って来た。帰って来た時に、両親はよく帰って来たね。と言って喜ばれる。人間の世界は、そういう矛盾に満ち満ちておる。そういう縁がもよおせば、どのようなふるまいもするかわからない。そこまで徹底して照らされる。知らされるということですね。すべての人々が、善し悪しに縛られた凡夫であるという。これはまことの智慧に触れて、初めてわかるのですね。

だからともにこれ凡夫ならくのみということ、お互いにそういう相対有限な存在ですねという、そういう出遇いがあるわけですね。そういう人間に開かれておる仏道が、「聞信如来弘誓願」という。如来の本願を聞いて、そこに表わされた真実に納得して、頷いてですね、本当に生きるものとなることができるという。いただいた命がなんと尊い命であるかということに目覚めると。獲信ということは聞信という。聞という、聞こえるということ自身が信心を表すものであると。これは本当にもう的確に、はっきりおっしゃってくださっている。

仏願の生起・本末を聞いて、疑いの心があることないということが聞ということなのですが。聞というのは本当に聞こえること。聞けると言う。私たちの日常的な会話の中でもね、聞こえるという。聞くということは信を伴っております。信がない時にはね、聞いていてもね、疑っています。どこか欠点を探そうとしておる。これはもう国会のやり合いというのは娑婆そのものですね。いかにして相手の欠点を見つけるかっていうようなことでね。ただそこには信がないわけですよ。やっつけることばかり考えている。本当に聞くことができる、聞こえるというのは信があるわけですね。家庭の中でもそうですよね。本当に聞けるということは信頼があるから聞けるのですよ。信頼がないと聞けないですね。浮気しているのではないかとかね。いろんなことをね。疑うという。疑心がどうしてもはたらく。

阿弥陀如来の弘誓願というところには、弘誓と言うところには広く、十方衆生のみなを救い遂げなければ、私は仏とはならないという誓いですね。誓いであるということはその所に仏の全存在。全存在をかけておるわけですよ。いのちをかけている。あなたが目覚めなければ私は仏とはならないという。阿弥陀とはならないというそういう誓いですね。そういう誓願がこの身にかけておる。これはもう本当にですね、驚くべきはたらきですね。私自身の上にこの身の上に私が目覚めなければ、阿弥陀は阿弥陀とならないと。法蔵菩薩が発願しても、阿弥陀とはならないと、そういう誓いですよ。

あまり並列に言うと問題があるかもわかりませんが、私は人間に生まれてよかったという

ことが言えないならば、父も母も親にはなれないわけでしょう。はっきりしていますよね。なんで勝手に産みくさったかという時には親として認められないわけですよ。生まれて来ない方がよかったです。そういうことは日常茶飯事としてあるわけですね。弘誓願を聞信するという事は、本当に人間の生活においては、根本的な一大事であるということがはっきりしていると思いますね。

そこに本願に遇って聞信するところに、どういうことが起こるかという事です、人間成就。私が私であることがかけがえのない事実でありましたと、そういう目覚め、自覚ですね。人間成就。人間が人間であること。人間として生まれた。よりによって人間として私たち生まれたって、とんでもないことだと。私が私として生まれたと。この父、この母あればこそ私が私として生まれたと。ここにこの父、この母、かけがえのない存在になるわけですね。その時私の人生も、私が私であるということが、何ものにもかえがたい、尊い。

清沢先生は、独立者ということを言われますが、本当に深いのちを持って生きる。独立者というところには独生独死独去独来という。一人生まれ一人死に一人去り一人来るといふ。そういう独生独死独去独来というふうな、そういう孤独ということ踏まえてそこに一人一人がこの充全ないのちをいただいて生きておるのであると。それが人間成就ということであると。で、次の段はですね、仏弟子としての道ということになるわけですが。大変なことを述べて展開しておられると思いますね。

やはり人間であること目覚め。人間成就ということが大問題ですよ。あの人間の生きる場所、世界、時代、いつの時代においても、どのような場所においても、人間であるというそういう事実気付いていけるということは大問題ですね。言葉を変えて申しますと、対話が成り立つか成り立たないか。響き合うか響き合わないか。これはもう今の時代の大問題じゃないですか。対話が成り立たない。こんな悲しいこと。対話が成り立つか成り立たないか。これは大問題ですね。

北朝鮮が、ああいう実験をやって成功したと喜んでおると。日本もその圏内にあるわけですね。アメリカも圏内に入ってきたことがあるわけですが。そこには対話が成り立たない。北朝鮮と対話したいという。あれは大事な意思表示だと思ふのです。私はね。対話という路線を絶対に断つてはならないと。対話の成り立つ道を選ばなければならない。

もし対話が成り立つ道というならば、核兵器を全廃しようではないか。そうしようということになるとね、やっとなんか、対話が成り立つのではないのでしょうか。こっちは核兵器を持っていてね、こっちは核兵器を作ると駄目だと言ってね、切るときに対話が成り立つかと。こういう話をするとね、非常にはっきりするわけなのですけれども。対話が成り立つということはやはり凡夫としてのね、平等の善し悪しに捉われ切っている、我が身であり、我々の国であるという、そういうふうな痛み、懺悔。

これがなくしては、対話は成り立つのでしょうか。どうでしょうか。痛み、懺悔がなければ、要求型になりますね。自是他非ですよ。自是他非というのは、自分は正しい、間違っていない、他が間違っていると。これは要求型ですね。要求型、あるいは非難型ですよ。対話は成り立ちますか。

これは家庭の中においても、父親の顔をしておるけど、恥ずかしい、私は親と言えようにはすまんねということがあると、息子は、俺も親を親として尊敬しないと。恥ずかしいことであるということ対話が成り立つということがあるのであるですね。非常に漫画チックに言いましたけど、決して漫画じゃありません。そういう問題だと思ふのですよ。自是他非ということが中々人間は強烈です。

そういう中において、如来の本願を聞信するという道が開かれて、念仏者として信心に生きる時に、仏が廣大勝解の人とのたまうと。これは『如来会』という経典の中に廣大勝解という言葉があるのですが。真の仏弟子ということを讃えるところに、廣大勝解の人と。分陀利華っていうのは、白蓮華。もし念仏する人は、人中の分陀利華である。白蓮華であると。白蓮華っていうのは、本当に

尊い華の中の華であるというふうな、そういう意味ですね。

それと白蓮というところには、非常に大事な意味があってですね、白蓮華というのは淤泥華と言われます。淤泥というのは泥の、ぬかるみです。蓮の華はどこに咲きますか。どろどろのところから根を生やし、成長して出て蓮の華を咲かせる。

これは『維摩経』の言葉を引いてですね、「高原の陸地には蓮華を生ぜず。卑湿の淤泥にすなわち此の華を生ずるが如し」。事実を踏まえての譬えですね。高原の乾いた陸地には蓮華は育たない。卑湿の淤泥。水の中でぬかるみの深いね、その中に入ると足を取られるようなそういうぬかるみの深いところで蓮の華が育つ。卑湿の淤泥というのは煩惱を表しておりますね。人間の煩惱を、自己として蓮の華が咲くと。これは凄い譬えなのですよ。卑湿の淤泥には蓮の華が咲くと。

そういう人が分陀利華であり、廣大勝解。廣大勝解者っていうことをね、実感を持って感ずる一つの道として、広に対しては狭い、小さな、劣った、塞がった。人間と人間との触れ合いに、そういう問題がありませんか。わかったようなことを言うておるけど、本当は善し悪し、己の善し悪し。計算立った。小さな世界。そして劣った、自分中心の。塞がった。廣大勝解というふうなはたらきに触れるとですね、狭小劣塞という自分の姿が知らされるということです。単に話ではないのですよ。ああ自分はなんと狭い小さな劣った塞がったものかなということとは廣大勝解のはたらきに触れて、そういう人に出会う。それを仏弟子と。

分陀利華も、真の仏弟子のところでは親鸞聖人は引いておられるわけです。もし念仏する人は、分陀利華と名づくという。この分陀利華につきましてはですね、大変色々な言葉で讃えておられます。『教行信証』の信巻の中の仏弟子を讃えるところですね。念仏者ということについてですね、

「分陀利」と言うは、「人中の好華」と名づく、また「希有華」と名づく、また「人中の上上華」と名づく、また「人中の妙好華」と名づく。この華あい伝えて「蔡華」と名づくる、これなり。もし念仏の者は、すなわちこれ人中の好人なり、人中の妙好人なり、人中の上上人なり、人中の希有人なり、人中の最勝人なり。
(真宗聖典 二四八頁)

言葉を重ねてですね、念仏者を讃えております。これは他人事の話ですか。人間に生まれてこない方が良かったというようなことを思って、親を怨み、世を呪い、時代社会に対して反逆しておったようなそういう人間が、阿弥陀の本願に遇うと、よき人のおおせに遇って、本願に遇う時ですね、廣大勝解の人と言われるような、本当にこの世界のことがよく領かれて、どのような状況の中にあっても、生きていくことが出来る人になるという。

私はどのような状況の中でも生きていくことができるというふうなそういう意味にね、受け取ることが出来ると思うのですね。それから人に生まれたということはまことに尊い事実であったと。仏弟子の道であったという。仏弟子となるというそういう道が開かれてきたのであると。それはね、非常に仏陀釈尊から我が友と呼ばれ、我が勝友という存在となると。私たちはそのことに触れているのですよ、すでに。

報恩講に挙げられる和讃の中に、

他力の信心うるひとを
うやまいおおきによろこべば
すなわちわが親友ぞと
教主世尊はほめたもう

(真宗聖典 五〇五頁)

親友であると。親しき友であるという。親友ですね。仏陀釈尊から我が友よと呼ばれている存在である。これは大変なことじゃないですか。孤独にあえいで生まれて来なければ良かったと思っていた人間が、本願に遇う時に独立者として誕生すると。いかなる現実の中をも生きていくようなそういう世界が開かれると。そういう人の誕生を我が親友であると。おお我が友よと呼ばれる存在ですね。そういう釈尊から我が友よと呼ばれるようなことがないと、仮のごまかしの友人関係というものの中に飲み込まれていってしまうと思います。

まことにこの一段は、念仏に生きるということが深い感動を持って、廣大勝解の人、分陀利華と呼ばれる。そういう人として誕生するのであると、讃えられております。時間が大分過ぎましたので、後の話し合いの時間も大事ですので、一応話のほうはこれで切らせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。